Catch the Movement 2

名古屋第二赤十字病院

市民のQOLの向上をめざし 地域で行う「あしの健康教室」。

世界に冠たる長寿国となった日本では、一方で高齢者の医療費の増大が問題となっている。そんな中、生涯を健康に生きるための医療に注目が集まるのは当然だろう。名古屋市に、足の予防医学が健康長寿の鍵のひとつになると考え、市民公開講座などを展開する整形外科チームがある。チームの代表者、名古屋第二赤十字病院の佐藤公治先生に話を聞いた。

第一整形外科部長
佐藤 公治先生

地域の整形外科医が集い コ・メディカルも参加して

名古屋第二赤十字病院は、名古屋市のほぼ中央に位置する昭和区の中でも特に文教地区として発展した八事（やごと）地域に位置することから「八事日赤」の通称で親しまれている。急性期病院として地域医療の中核的な機能を果たすと同時に、1990年からは病病連携・病診連携のシステムづくりにも取り組み、近隣約1,000の医療施設と友好的な連携体制を築いている。

そうした中で同院第一整形外科部長の佐藤公治先生は、10年あまりの時間をかけ、地域医療のボトムアップに熱心に取り組んできた。その象徴が「八事整形会」だ。「一医師あるいは一病院の力の及ぶ範囲は限られている。すべての住民が健康に安心して暮らせる地域にするために医師同士がつながる必要がある」との理念のもと、1999年にスタートした。

「地域の整形外科医に呼びかけて発足した会で、以来、症例検討を中心とする勉強会と、顔の見える連携のための懇親会を継続的に行っています」（佐藤先生、以下同）

整形外科分野の治療において、標準化されていない部分を少しでも解消できればと感じたのが発足のきっかけ。会の活動は意義あるものとなったが、間もなく、佐藤先生は「待てよ、医師だけでいいのか？」との疑問を抱く。

「そもそも整形外科は、医師と多職種にわたるコ・メディカルとが協力し合ってこそ成立する分野。急性期、回復期、維持期と機能分化が進んできた現在、転院は避けて通れませんが、その際にも現場で実務を担うのは医師だけではなく、看護師や理学療法士、ケースワーカーであることも多い」

ならば医師に限らずあらゆる医療従事者が集い、ともに地域の医療を考える場も必要だろうと、2003年、新たに「八事整形医療連携会」を発足させた。

近隣５区の整形外科医療にかかわるすべての医療機関の、すべての職種の人々に参加を呼びかけてスタートした連携会は活発に活動を展開している。中でも目を引く実績は、大腿骨頸部骨折の地域連携パス開発だろう。先の診療報酬改定において加算対象となった同疾患の地域連携パスだが、厚労省の注目と評価のきっかけのひとつが、八事整形医療連携会の取り組みであったと指摘する関係者は多い。

健康な人生のための「あしの健康教室」

佐藤先生は、今また、「厚労省が気づいていない、注目していない」分野で動き始めているという。「足」の健康を守る予防医学、市民啓発活動だ。

【資料１】「あしの健康教室」（2008年６月21日開催）の模様

主催者の皆さん（最前列中央が佐藤先生）

「整形外科分野では足の疾病は、手ほど重視されてこなかったのが実態ですが、近年は、糖尿病等に起因する足の循環障害から整形外科にかかる患者さんが増えています。

小さな傷から切断にいたるなどの不幸なケースをなくしたいと考える内分泌分野の先生方に声をかけられ、私も含めて八事整形医療連携会の会員が足の健康教室で講演するなどの機会が増えたのが発端でした」

女性のハイヒールからくる変形や痛みに始まり、最悪は切断にいたる循環障害まで、足の疾病には、実にさまざまな原因や症状がある。

「整形外科では、『足』は足首から足先までを指しますが、股関節から足先までを考えると疾患の数はとても多くなり、QOLにかかわる重大な症例も少なくありません」

たとえば、高齢者の場合には、大腿骨頸部骨折をきっかけに寝たきりになってしまい、認知症を併発するケースもよく見られる。

「自然界の動物なら、起き上がれなくなることは死を意味します。人間は寝たきり＝死ではないけれど、そういう状態でただ長寿というのは、幸せではないはずです。

膝関節に痛みを抱えて自由に歩きまわれない状態も同様でしょう。

日々を健康に楽しみながら一生をすごせてこそ、人間の生き方だろうと思います。

生きてさえいればいいのではなく、健康寿命を考えたいのです」

厚労省が現在、力を入れている４疾患５事業は、がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病、そして救急医療、災害時医療、へき地医療、周産期医療、小児医療。これを見る限りでも、社会でいまだにQOLの重要性が正確に認識されているとは言い難い。

「誰かが旗を振って動き出し、行政に気づいてもらう必要がある。足の健康を守る予防医学の一環として、私たちが『あしの健康教室』をスタートさせた動機は、そこにあるのです」

チーム養成にもつながるオリジナルの冊子を作成

足の健康に関する社会啓発を行うプロジェクトは2006年、「八事足の健康会」（後に「八事あしの健康会」に改称）の名称でスタートした。中心メンバーは、名古屋第二赤十字病院整形外科の医師、看護師、理学療法士、義肢装具士たち。具体的な活動は、数ヵ月に一度の「あしの健康教室」開催と、そのためのパンフレットづくりだ。教室への参加呼びかけは、連携会の活動範囲と重なる八事全域に及び、会に加わっている医療従事者たちはもちろん、区の薬剤師会の協力も得て、健康教室は市民生活の現場に浸透している。

「地域の開業医の皆さん、調剤薬局の方たちや、在宅医療にたずさわる訪問看護や介護関係の方たちが協力してくださっています。おかげさまで教室には毎回150～200名の市民が集まりますし、配布するパンフレットも好評をいただいています」

参加者以外からも「ほしい。わけてもらえないか」といった声が多く、地域外からの問い合わせも相次いで、増刷や改訂が重ねられているというパンフレット。執筆はもちろんイラストも編集も、すべてチームメンバーの手による、まさしくオリジナルの冊子だ。実は、パンフレット作成こそがプロジ

【資料２】「あしの健康教室」で配布されたパンフレット

中面例１

中面例２

ェクトのもうひとつの肝なのだと、佐藤先生は語る。

「みんなで存分に話し合って協力し合い、忙しい時間をやりくりして担当の作業をこなしたりするうち、本当のチームができ上がるのです。確かに整形外科はチーム医療の進んだ診療科ですが、それでも職種が違えば、お互いの領域はわからないもの。パンフレットをつくりながら、互いに理解を深め、細かい溝を埋めていく意義はとても大きいでしょう」

医療のプロフェッショナルが作成することで、より正確で、きめ細かい表現が可能になる点も見逃せない。特にイラストによる解説部分にはそれが顕著に表れている。「あしの健康教室」パンフレットの絵は、すべて同院整形外科の看護師によって描かれており、微妙なニュアンスが必要な部分も完璧に表現され、プロも顔負けな医療従事者ならではのイラストと評判だ。

コミュニケーションを継続して、情報交換を

2007年４月に始まった健康教室は、「足のケアと靴について」、「膝周りの治療や体操について」、「股関節に関する病気の予防と治療について」の３回が、すでに終了（【資料１】）。パンフレットも、市販されても不思議でないほどレベルの高い、しかも一般市民や患者にわかりやすいものが３冊完成している（【資料２】）。

「コミュニケーションが密になり、職種間に真の連携ができて本当に良いチームに育ちました。あとは市民への医療教育、社会啓発です」

まずは、八事地域でさらに広く深く浸透させ、そして八事を発信地として足の予防医学を日本中に広げていく構想だ。

「医療は、中央にいる偉い医師たちだけが担っているものじゃない。

地方で、地域で、医師だけでなく、すべての医療従事者たちが、患者さんや住民の方たちとコミュニケーションしつつ予防医学を充実させる動きにこそ医療の未来があるのだと感じます。そのためにも、当面の具体的な目標を一つひとつ達成したいですね。現在で言えば、まず八事で、教室参加者の年齢層を広げていくことでしょうか。たとえば、骨粗鬆症予防、転倒予防などの話は、高齢になってからよりもむしろ、もっと若い世代にこそ、聞いてほしいですから」

佐藤先生の言葉からは、いくつものプロジェクトを牽引してきたエネルギーと自信がうかがえた。佐藤先生と先生が率いるチームが、これからも地域医療の最前線で旗振りの役割を果たしつづけることを期待したい。

●DATA
名古屋第二赤十字病院
所在地：〒466-8650
愛知県名古屋市昭和区妙見町2-9
TEL：052-832-1121
URL：http://www.nagoya2.jrc.or.jp/
病床数：812床
診療科目：内科、神経内科、呼吸器科、消化器科、循環器科、小児科、外科、整形外科、形成外科、脳神経外科、呼吸器外科、心臓血管外科、小児外科、皮膚科など
＊同院ホームページより転載